SISIO FALL/WINTER 2025 COLLECTION – ANITYA <諸行無常>

旅路

シャーロット・シャオは、人里離れた国境地域に惹かれ、クリエイティブな発見の道を歩む。
スカンジナビアのアイスランドとの出会いが、彼女に、その地に深い敬愛の念を抱かせた。広大な風景と果てしなく広がる空、自然の壮麗さが比類なきパワーと驚異の感覚がぶつかり合う、未開の美の地。

グリーンランドが新たな目的地となり、彼女はそこで 1 週間を完全に孤立した状態で過ごした。激しい嵐のため、他では味わえない深い静寂を体験。嵐が通り過ぎ、雨の勢いで氾濫するフィヨルドの壮大な光景を目の当たりにした。この孤独が彼女に人生の意味を深く考えさせ、真の意味を探し求めさせた。小さな帆船で漂流し、心にしみる自然のリズムに包まれながら、新しいコレクションがどのように自分の気持ちを表現したものになるかを想像しはじめた。
数ヵ月後、彼女は黙示録的な山火事と煙に包まれたロサンゼルスにいた。人工的な気候危機が、かつてないスピードで地球を覆っていた。

クリエーション

SISIO FALL/WINTER 2025 COLLECTION は、普遍的な真理の探求として仏教書道の要素を織り込んでいる。仏教哲学は「成・住・壊・空」の世界の生成消滅を説明する四つの時期の循環が説かれており、この概念は宇宙進化や多次元時間に関する現代の科学理論と驚くほど共鳴する。それは、変化こそが唯一の不変であり、無常は悲劇ではなく、存在の根本的な法則であることを私たちに思い出させる。SISIO は、その特徴的な彫刻的な曲線とテキスタイルの手染めに拘りながら、新たな次元のクラフツマンシップも取り入れている。今回のコレクションでは、シャーロットは母親の庭に咲く紫陽花からインスピレーションを受けた。裁断、染め、再構築という完全に手作業のプロセスを通じて、花びらを丹念に分解・再構築。紫陽花は夏に咲き、夏は、彼女にとって最も身近な季節である。アメリカに留学していた彼女にとって、夏は故郷に帰れる季節だった。このモチーフは、個人的でありながら普遍的であり、遠い夢に憧れる一方で、すでに身の回りにある美しさを見過ごしてしまうという、人間に共通する傾向を反映している。「私たちはいつも素晴らしいバラ園の地平線を夢見ますが、今日、私たちの窓辺のバラを楽しむことを忘れています。」と彼女は言う。

コレクションのカラーパレットは、地球そのものに根ざしたもので、温かみのあるニュートラルカラーとオーシャンブルーが、地球の核となる要素に呼応している。アイスダイやタイダイ技法を駆使し、オーロラ、虹、氷河の変わりゆく色合いを表現。これらの流動的な変化は、自然のデザインの活力と儚さを映し出している。同時に、すべての生地選びは、サステイナビリティと生分解性へのこだわりを貫いている。シャーロットはまた、コレクションに登場するすべてのバッグとシューズのデザインに多大な努力を傾け、アクセサリーにコレクションの美観において重要な役割を与えた。バッグにあしらわれた立体的な紫陽花と蓮は、ひとつひとつ丁寧に手染めされ、レザーから彫り出されたもので、職人の技と自然の繊細な美しさを表現している。靴は一足一足が手作業でペイントされ、対応する服を引き立てるように磨き上げられ、複雑なビーズの装飾が深みと芸術性を添えている。

これらのアクセサリーは、自然の生々しいエネルギーを体現しているだけでなく、静かで瞑想的なエレガンスを漂わせ、コレクションのハイライトとなった。サウンドスケープは、Björk と Ólöf Arnalds、そして日本のインディーロックバンド「Sly」とのコラボレーションによって作り上げられた。
シャーロットはアイスランドを訪れ、風のささやき、滝の轟音、野生の鼓動のようなリズムなど、自然のサウンドスケープを録音、それらの音が織り重なる。幻想的なギターアレンジと、リードシンガーである Hector の哀愁漂う歌声が加わり、聴く者を大自然の中心へと誘うような音の風景が完成した。

このコレクションは、無常へのオマージュであり、逞しき自然への瞑想。そして、私たちの共通の未来を形作る選択について考えるよう呼びかけるものである。